

なされていることもまた、通常の美的体験と同様である。

侘びの美を特殊なものとするのは、むしろ、現実の時空から隔離された後に人が導入される世界の有様である。人は、利害と名聞にまみれた俗世の※塵境(じんきょう)を去つて清淨地へと招き入れられるのであり、侘び茶室が簡素・簡略を重んじるのもまさにそれゆえである。

バチカン宮殿の天上にびつしりと書き込まれた美しい無数の絵画と比較してもいいだろう。その宗教的空間も、確かに人の日常的空间からは隔離しており、日常的因果連関からは切り離されている。また私たちはその絵画を何らかの実用に供しようとして見てはいなし、また研究者として解明的な目で見てはいないから、美的工芸も成立しているとしよう。しかし、その天井画には、通常の日常生活にはありえないほどの多彩な意匠が描き込まれている。その様子は、やはり内容的に見ても日常的な状況を逸脱していると言えるが、それは※豊饒(ほうじょう)さへと逸脱しているのである。

②侘びの美の世界は、むしろ反対の方向へ進む。芸術的エポケーによつて現実の時空から乖離するのは共通だが、その内容においては、日常世界の持つ通常の豊饒さ、裝飾、齊一さを去つて数的乏しさ、簡素さ、不均齊へと導き、しかもそこに美を発見せしめるのが侘びの美的特徴なのである。侘びの美は、通常の物質的豊かさをあげて差し控えるのである。

例として、利休朝顔の話をあげておこう。あるとき利休の庭の朝顔が見事に咲いているということを秀吉に伝えた者がいて、秀吉は見たいと思つて朝の茶会に出かけたが、庭に一枝も朝顔がないのでもうそう不機嫌になつた。そうして茶室に入ると色あざやかな一輪の朝顔が床に生けてあつた。秀吉をはじめ供の者たちもみな目が覚める心地がして、③利休は非常に称讃された。これは利休がその朝すべての朝顔を切り、ただ一輪のみを生けたものと思われるのである。

〔三〕 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。(25点)

侘びの美が芸術としての茶道で表現されるとすれば、その美と芸術とは日常的・実用的態度からの※エポケー機能を備えているはずである。そのことは、私たちが茶を飲む道具としてだけ茶碗(ちゃわん)を用いるのではなく、むしろ美的鑑賞の対象としてそれを見るということに端的に表われているだけでなく、茶室へと通じる「露地」の持つ特性にもよく表われている。※谷川徹二は露地の意味を説明して「それは外の世界からすなわち日常生活的空間から、茶という別世界に導きいれる通路たるところにある」と述べ、①彼が「芸術的離離性」と呼ぶ日常空間からの離脱する芸術の特性を、茶道もまた持つことを認めている。

しかし、これは芸術としての侘び茶が他の芸術一般と共に持つ形式的特性であつて、現実的時空からの※乖離(かいり)を旨とする芸術的エポケーにほかならない。同じように私たちは、美術館の入り口から展示室に至る通路でも日常生活空間から離脱するだろうし、書院座敷の茶で用いられる華麗な天目茶碗をも美的対象として鑑賞する。また、私たちが茶碗の美に見入るとき、そこで「美的エポケー」が

開示機能の一契機として芸術作品が人の体験を量的に拡大してくれるという側面が、侘びの美の場合、非常に限定的であると言わねばならない。利休朝顔の話にあるように、侘びはもともと簡素さ、数的乏しさを旨とするのであるから、人の見知らぬ新奇な対象を草庵に満たすというようなことはなく、むしろ量的には減少の方に向へ向かうのである。すると、この場合、開示機能はむしろ第一の契機、すなわち現実への眼差しの質的転換が主となるはずである。この転換はどのような特徴を持つのだろうか。

人の日常生活はさまざまなものに取り囲まれていて、私たちはそれを利用しながら生きている。たとえば自分が身につけている服や靴、身の周りの机、イス、カップ、周りにいる誰それ等々。私たちの暮らしが円滑に行なわれるためには^④「私たちはそれらに一般名を付け、事物や出来事の進行を把握する。たとえば「佐藤は椅子に座りコップを手にとつて水を飲む」。このとき私たちの悟性（理解力）は身の周りのものを概念的に把握してラベルを付け、それらの関係を認識するが、この把握は私たちが個々の事物を深く見つめることを妨げる。そうしないと人の実生活は滞るからである。

美としての侘びの戦略は、この悟性の活動を縮減することにある。数的な乏しさは私たちが多くの事物に囲まれているときに働かせている悟性の概念的把握および規則性への志向を停止し、目の前にある一個の茶碗、一服の軸に私たちの意識を集中させる。そしてその集中した事物において再び悟性の働きを超える事象の新鮮な変化を構想力が捉えるとき、私たちはそこで現実と新たに触れなおして美を意識する。日常において悟性が活発に働いているとき、私たちはむしろそこに单调さを感じる。概念で括られたものは見慣れた日常でしかない。私たちがそこに美を見出すとすれば、活発に働く悟性の規則性への志向を超えて活動するさらに活発な構想力の働きが必要である。ところがこの悟性の働きが戦略的に縮減されれば、私

たちの構想力はやすやすとそれを超えるだろう。人が茶碗に銘を付けるのは、それを茶碗一般としてではなく、私たちが向き合うべき一つの対象とするためであり、私たちが一個の茶碗に見入るときもはや「茶碗」という普遍的概念は消え、それが持つ微妙な景色を眺めて人はそこに美を見出す。

もちろん、こうしたいわば個別への集中は、西洋美術でもなされている。侘びの美の特色は、それを自覚的に徹底して行なつところにある。しかも侘びにおいては、こうした集中が、均斎を欠き、色彩に乏しいものへなされるのである。均斎はそれだけで悟性を刺激し、喜ばせる。また、強い色彩の対照はそれぞれの色を持つ個別的なものを際立たせると同時に悟性にそれらの関係の思考を訴える。単調な色彩は秋の夕暮れ時の景色のように、すべてを一体化し、思考を眠らせる。

それではなぜ侘びはこうした^⑤「美的戦略を持つのか。※大拙は「醜や不完全なものを通して、完全感を表現する」とも「一即多」とも言う。あえて表現を乏しくすることで、その切り詰められた現実の中に全体が宿つていることを知らしめるというわけである。私たちの実用的な雑念を払拭し、悟性の概念的働きを休めて私たちが目の前の些細な現実に向かうとき、私たちはそこに私たちの思考を超えた無限を、美として見出すのであり、侘びの美はそのように人が己の脚下に目を向けるべきであることを、美を通じて知らしめるのである。

侘びの美はその独自な芸術的構えによって私たちの脚下にある現実を見つめ直させる。これは大量生産と大量消費の時代を超えて進むべき現代人の生活指針としても、なにほどうか教えるところがあるのではないか。

（佐藤透著）『美と実在——日本の美意識の解明に向けて——』
による。（一部省略がある）

(注) ※エポケー機能……「エポケー」とは立ち止まること、停止すること。

※谷川徹三……哲学者。(一八九五～一九八九)

※乖離……そむき離れること。

※塵境……ちりで汚れた世界。

※豊饒さ……豊かに多いこと。

※草庵……わら・かやなどで屋根をおおった粗末な家。

※大拙……鈴木大拙。仏教学者。(一八七〇～一九六六)

問1 ①彼が「芸術的隔離性」と呼ぶ日常空間から離脱する芸術の特性とあります。茶道における「芸術的隔離性」を説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 茶道において、茶碗を美的鑑賞の対象よりも、茶を飲む道具として実用的に用いるということ。

- イ 茶道において、茶室への通路が現実から茶の世界へ導きられる役割を果たしているということ。

- ウ 茶道において、書院座敷の茶によって利害と名聞にまみれた俗世の塵境へと招き入れるということ。

- エ 茶道において、一つの体験が量的に拡大されることで日常の生活からは隔絶されるということ。

問2 ②侘びの美の世界は、むしろ反対の方向へ進む。とあります。次は、筆者が考えるバチカン宮殿の天井画と侘び茶室の「藝術的エポケー」の違いについてまとめたものです。空欄Aにあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。また、空欄Bにあてはまる言葉を、本文中から五字で書き抜きなさい。(6点)

- バチカン宮殿の天井画
ア ことによつて、日常にはない豊かさへと逸脱し、現実の時空から隔離する。

イ 簡素さ、不均齊へと導くことによって、通常の豊かさを差し控え、現実の時空から隔離する。

問3 ③利休は非常に称讃された。とありますが、その理由として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 朝顔を一輪だけにすることで、現実とは切り離された別世界へ導くことができたから。

- イ 庭のすべての朝顔を切ることで、茶室の一輪の朝顔だけに注目させることができたから。

- ウ 新奇な対象を茶室に満たすことで、一輪の朝顔のあざやかさを際立たせることができたから。

- エ 朝顔を一輪生けることで、向き合つべき一つの対象として美を意識ことができたから。

問4 ④私たちはそれらに一般名を付け、事物や出来事の進行を把握する。とありますが、これと同じ内容を表している部分を本文中から十八字で探し、そのはじめと終わりの三字をそれぞれ書き抜きなさい。(5点)

問5 ⑤美的戦略を持つとありますが、筆者は、侘びの持つ美的戦略はどのような契機をもたらすと考えていますか。次の空欄にあてはまる内容を、現実、悟性の二つの言葉を使って、三十五字以上、四十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

- 侘びの持つ美的戦略は、
35. ことによつて、日常にはない
45. という契機をもたらす。